

雨はぴちばた

作 ラビンドラナート・タゴール

訳 内山眞理子

日のひかりがうすらいだ

いまにも太陽がしずむ。

空いっばいに雲がおしよせる

空の月をほしがるかのように

雲のうえに雲がかさなり

色のうえに色があつまる

寺院の鉦がデインドン

祈りのときをしらせる

岸のむこうがわに雨がやってきた

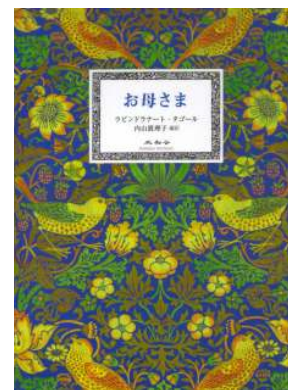
樹々の濃緑がかすむ。

岸のこちらがわは雲のいただきに

きらめく無数の宝石があらわれる。

しめった雨季の風によみがえる

ちいさきころの詩――



この詩がのっている本
ラビンドラナート・タゴール 著
内山眞理子 編訳
『お母さま』(未知谷刊) P37

「雨は^{あめ}ぴちばた

河は^{かわ}おおみず」

空^{そら}いちめん^{くも}に雲はあそび

さかい^め目らしきものもなく

国^{くに}から国^{くに}へとたわむれ^{なが}流れて

だれかにとめられることもなく。

さきそめた^{はな}花の^{もり}森を

いくつもこえて^{あめ}雨をそそぎ

そのあそびはいっしゅんにして

たちまちあたらしくなる

たわむれる^{くも}雲をみているとつぎつぎと

子ども^このころのあそびを^{おも}思いだす

部屋^{へや}のすみっこにかくれては

くりかえしたかくれんぼ。

するとよみがえる

ちいさき^{うた}ころの詩――

「雨^{あめ}は^{あめ}ぴちばた

河^{かわ}は^{あめ}おおみず」

一 いただき

いちばん上のこと。ちょうじょう

二 雨季

インドでは雨が集中してふるきせつと雨がほとんどふらないきせつがあります。

思おもいうかべる なつかしき部へ屋やを
おかあさまのほほえみを

雷かみなりのどろきに

胸むねがどきどきしたことを。

寝しん台だいのはしつこに

坊ぼうやがねむる

おかあさまにさんざん

やんちゃをして

ききわけのない子こは

部へ屋やのなかでおおあばれ

外そとは雷かみなりがどろき

まるごと世せ界かいがふるえだす

するとよみがえる、おかあさまの

くちずさむ詩うた――

「雨あめはびちばた

河かわはおおみず」

思おもいだす

心こころをいためた王女おうじよの話はなし

幸福こうふくの王妃おうひと

不幸ふこうの王妃おうひのおとぎ話はなし

部屋へやのすみっこで

ちらちらゆれるランプのひかり

いっぽうの壁かべにうつる

黒い影くろかげのたわむれ。

外そとからひびく雨あめの音おとだけが

ざん、ざん、ざん――

しんとなったやんちゃ坊ぼうやは

おとぎ話ばなしに耳みみをすます。

するとふとよみがえる

くもりの日ひの詩うた――

「雨あめはぴちばた

河かわはおおみず」

雨あめがふったのはいつのこと

河かわのおおみずはどこのこと。

三 シヴァ神しんに娘むすめが三人お嫁入りさんになよめいしたのは

どれほど昔むかしむかしのことかしら。

三 シヴァ神 主にインドでしんこうされているヒンドゥー教の神様。

その日もこんなふうひに

雲くもがおしよせ

ときどき稲妻いなずまや

かみなり

雷かみなりにおそわれたのかしら

さんにん

よめい

三人がお嫁入りして

それからのちはどうなったの。

四
いずこの国くにの

いずこの河かわのことなのか

こ

うた

子もり詩はどこの坊ぼうやに

だれがうたった詩うたかしら――

五あめ

「雨はぴちばた

かわ

河はおおみず」

詩集『おさなご』所収

四 いずこ どこ

五 「雨はぴちばた河はおおみず」はベンガルで古くから伝わる詩。全文は

「雨はぴちばた、河はおおみず シヴァ神に娘が三人お嫁入り

嫁ごのひとりはお飯をたいておさんどん べつの嫁ごが召しあがり

さいごのひとはなにも食べずにお里へかえる」(『お母さま』注より)